

# パーソナリティ・インベントリーによるプロ野球選手の 成功予測尺度作成のための研究

平田 久雄\* 神田 順治\*\*

Construction of a scale of personality inventory for the prediction  
of the success in the professional base ball players

by

HISAO HIRATA\* and JUNJI KANDA\*\*

## Abstract

In order to construct a scale of personality inventory for the prediction of the success or failure in the later years of professional baseball players, the revised version of MMPI was administered to the rookie professional baseball players. The responding rates were examined in all test items for the successful and the unsuccessful groups which were divided according to their official league performances.

So as to discover combinations of scaling items in which points for both groups show remarkable differences, the weight index for each item was calculated by the application of multiple correlation ratio method: then, from which the most significant contributory index was alternatively selected through the judgement of significant contribution made by each item for the purpose of differentiating both groups in terms of scaling point.

As the result, the combination of final 33 items was determined as the satisfactory scale, both in theory and practice, for its best differentiation of the points in two groups. [Proceedings of Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo, No. 9, 17-23, 1975]

## 緒 言

一般に人がスポーツ選手として大成するか否かは、個人の側の条件として、彼のスポーツ選手としての資質・適性によるところが極めて大である。ここで要求される資質・適性には、まづ運動能力をふくめた身体的素質が基本となっていることは言うまでもない。しかしスポーツでの成功には、単に身体的、体力的に優位なことだけでは十

分ではない。練習の場面、試合の場面を問わず、精神的、心理的要因の重要性は、多くの人の指摘するところであり、幾多の文献で言及されている。特にプロ野球のように、一瞬の判断、極度の集中力を要し、敵味方のプレーヤー、観衆、マスコミ等さまざまな社会的圧力に耐えていかなければならない職業では、なおのことである。La Place<sup>1)</sup> は、MMP I を用いてアメリカのメジャーリーグとマイナーリーグの野球選手の性格特性について研究

\* 東京大学教養学部体育研究室

\*\* 東京大学教養学部講師，日出学園

し、その結果プロ野球選手として大成するための必要条件として、自己を訓練して自分のエネルギーを一定の目標に集中させること、協調的な人間関係を自からつくり出すこと、自発的な行動力をもつことなどをあげている。

われわれも、わが国のプロ野球選手について MMP I 東大改訂版を用いて研究を重ね、その研究経過の一部は既に数度にわたって報告してきた<sup>2), 3), 4), 5), 6)</sup>。われわれはさらに昭和39年度より数年間毎年プロ野球界に入って来た新人たちに、MMP I 東大改訂版を実施し、彼らのその後の活躍を追跡し、成功した選手と脱落した選手のパーソナリティ特性の差異を明らかにし、性格面での適性を発見しようと試みたのである。本研究はこれら一連の研究の最終的報告となるものであり、最終目標であった「プロ野球選手の成功予測尺度」の項目選択に関して多変量解析的方法を適用した試みについて報告する。

われわれの用いたパーソナリティ・インベントリーの MMPI 東大改訂版の一つの特徴は、MMPI の作成者の1人である Hathway<sup>7)</sup> が指摘しているように、このインベントリーにふくまれている質問項目の新しい組合せによって、新しい診断尺度を作成することが可能なことである。新しいスケールの代表的な例としては、Taylor<sup>8)</sup> の不安傾向スケールや Gough<sup>9)</sup> らの支配性スケールなどが有名である。しかし、スポーツ選手の性格特性を直接的に判別するための尺度化を試みた例は極めて少なく、わが国では、平田・市村<sup>10)</sup> による「TSP Iにおけるスポーツマン尺度の作成」があるだけである。この場合のスポーツマンは特定のスポーツ種目ではなく、陸上、水泳、体操、サッカー等10種目ばかりのスポーツ選手と、非スポーツ人としての一般大学生との比較で作られたものであるが、比較対照群の標本のとり方に若干問題点が存在する。

## 目 的

この研究の目的は、プロ野球選手における成功者群と非成功者群との間で、パーソナリティ・インベントリー (MMP I 東大改訂版) の全項目応答に現れた差異を分析し、両群の得点になるべく

顕著に分離するような尺度項目の組合せを発見して、プロ野球選手としての将来性を予測する尺度を作成することである。

## 対 象

昭和38年より42年までの5年間に、新しくプロ野球各球団に登録された新人選手で年齢は18歳から27歳にわたり、平均年齢は19.4歳であった。全員がまだプロ野球選手としての経験はなく、テスト実施時期は新人研修講座を受講中であるからプロ球団への適応状況、貢献度等も白紙の、全く等しい条件に置かれていたと考えてよい。

さらにその後の彼等の公式戦での活躍の記録を参考にして、少なくとも2年以上にわたって出場の頻度が高く、プロ野球選手として一応の水準以上の活躍を認められるものを選んで、成功者群とし、公式戦において出場する機会がほとんどなく登録後2年以内に契約解除となったものを非成功者群に分類した。標本はテスト結果が有効な資料だけにしぼられ、成功者群37名、非成功者群76名が選ばれた。

## 方法と結果

まず第1に、成功者群と、非成功者群のそれぞれについて、MMP I 東大改訂版にある524項目の、はい、いいえの回答率を調べ、両群の回答率の差について  $\chi^2$  検定を行って、有意水準の高い方から79項目を、予測尺度の候補項目として選出した。79という項目数には特別な意味はなく、最終的に選ばれるであろう尺度項目数を実用的観点から考えて30ないし40と予想し、それよりは十分に多い項目数として選んだだけである。これら79項目の両群の標準得点の平均は、表1の通りである。

次にこれら候補項目が成功者群と非成功者群の判別にどれ程の重要性をもっているかを知るために、芝<sup>11)</sup>によって重相関比法と呼ばれる判別関数式を適用した。この方法は、外部基準として群の指定がなされている場合、群間の差を顕著に分離するため、予測変量(ここでは候補項目)に重みを与えて合成変量を作り、基準変量との相関比が最大となるような重みづけを求めるというものであ